研究主題

子どもが「学びをつなぐ」カリキュラム・マネジメント

1　本主題設定の経緯

本校では、一昨年まで「各教科等の特質に応じた学びの本質」という主題の下、研究を行ってきた。３年間の研究をとおして、各教科等において「深い学び」をどのように捉えるのかということを明確にできたことに加え、**「行きつ戻りつしながら、よりよい解決の在り方を探り続ける過程に生じる学び」**といった、教科等を超えた深い学びの共通項を見いだすこともできた。

さらに、研究を進めていくなかで見えてきたことがある。それは、例えば、「理科の学びを算数科の学びのなかで生かす子どもの姿」や「国語科の要約する力を生かして、社会科の本時のまとめを簡潔に行おうとする姿」である。つまり、**各教科等の特質に応じた学びの本質に迫る授業で身に付けた「資質・能力」を、子どもは教科等の枠を超えて発揮していたのである。**

各教科等で身に付けた資質・能力を、教科等の枠にとどまらず、自在につなげていく姿。そのような姿を引き出すことが、本校が育成をめざす資質・能力の育成につながっていくのではないか。そして、そのような子どもの姿を引き出すにはどうすればよいのか。それが本研究の出発点である。

では、我々がめざす子どもが「学びをつなぐ」姿とは、一体どのような姿なのか。研究をスタートするにあたり、各教科等の捉える姿からその共通項を見いだし、以下の３つに整理し、研究を進めていくこととした。

○　これまでの学びを生かす

…　授業のなかでこれまでの学びで得た知識や技能、培ってきた見方・考え方を働かせる姿

○　仲間の考えを生かす

…　仲間の様々な見方・考え方にふれ、自分の見方・考え方を見つめ直し、さらによりよくする姿

○　日常生活とつなぐ

…　日常生活と学びとを双方向につなぎながら、考えを深める姿

また、「中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）」に、次のような記述がある。

各教科等で育まれた力を、当該教科等における文脈以外の、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力に更に育てたり、教科等横断的に育む資質・能力の育成につなげたりしていくためには、学んだことを、教科等の枠を越えて活用していく場面が必要となり、そうした学びを実現する教育課程全体の枠組みが必要になる。

ここから見えてきたのは、我々のめざす「学びをつなぐ」子どもの育成には、「学びをつなぐ」ための学習指導だけでなく、それを支える教育課程編成の在り方という視点が欠かせないということである。そこで、その２つの側面からアプローチを行うべく、主題を**「子どもが『学びをつなぐ』カリキュラム・マネジメント」**とし、研究を進めることとした。

2　２年次の方向性～１年次の成果と課題から～

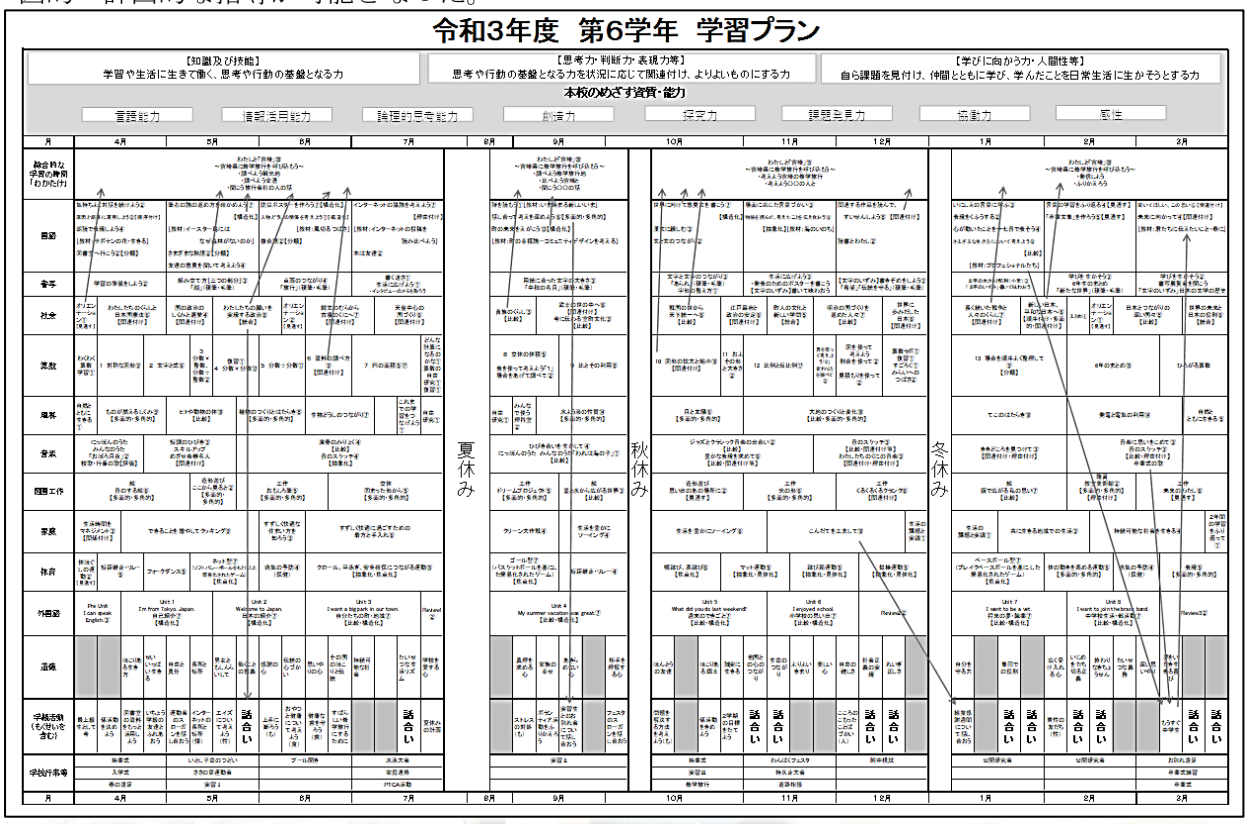
⑴　本校が育成をめざす資質・能力の明確化

カリキュラム・マネジメントの目的はあくまでも「本校が育成をめざす資質・能力」を育成することであり、カリキュラム・マネジメントそのものが目的化してはならない。そこでまず、本校が育成をめざす資質・能力とはどのようなものなのか、より簡潔な言葉へと変換し、共通理解を図ることで、研究の目的を明確にすることができた。

○課題発見力	○創造力	○論理的思考力	○探究力
○協働力	○感性	○言語能力	○情報活用能力

⑵　学習プランの見直し、改善

本校がかねてより作成していた単元・題材配列一覧表（以下学習プラン）の改善を行った。まず、各教科等で関連している学習内容の配置を工夫した。さらに、教科等横断的な学びを行うための中核を担うとされる生活科、総合的な学習の時間、特別活動を学習プランの中核に据え、各教科等で身に付けた資質・能力が生活科、総合的な学習の時間、特別活動のどの学習場面で生かされるのかという関連を矢印で明記した。そうすることにより、内容面のみならず、資質・能力面からも子どもの学びをつないでいった。このように、学習のつながりを教師が把握することによって、より意図的・計画的な指導が可能となった。



⑶　各教科等における「学びをつなぐ」ための学習指導

先に述べた「学びをつなぐ」３つの姿を基に、各教科等で子どもが「学びをつなぐ」学習指導の在り方について研究を行った。

１年次は、「これまでの学びを生かす」ための１つの手段として、総合的な学習の時間の学習指導要領解説にある「考えるための技法」に着目した。例えば、「考えるための技法」で紹介されている「比較する」は、どの教科等においてもよく用いられている。教師は、各教科等のねらいや本時の目標に迫るべく、思考させる場面において意図的に「比較する」という技法を活用させ、学習活動を展開してきた。これまで各教科等で活用させてきた「比較する」という技法を、様々な場面で子どもが意識的に活用し、情報を整理・分析する学習経験を積み重ねていくようにすることで、その技法が汎用的なものとなり、一層各教科等の関連が図られるのではないかと考えたのである。このように、日々の授業のなかで活用する経験を積み重ねていくことで、教科等内や他教科等の授業において、子どもがこれまでに学んだ「考えるための技法」を進んで生かそうとする姿を見ることができた。

しかしながら、１年次の取組の成果とともに、以下のような課題も見えてきた。

○　学習プランについて、果たしてこの計画で、本当に子どもの学びはつながっていくのか、より効果的なつながりはないか等、実施・評価・改善を行っていく必要がある。

⇒　PDCA サイクルの形成による学習プランの洗練

○　「考えるための技法」として例示されている技法が必ずしも全ての教科等の特質に合うとは限らず、「考えるための技法」を各教科等で無理に活用させようとすると、我々が大切にしてきた各教科等の特質がぼやけてしまう側面が見られた。また、本来の目的であった「学びをつなぐ」３つの姿が、各教科等で現れていたのかということが検証されぬままになってしまった。

⇒　「学びをつなぐ」３つの姿に重点を置いた学習指導の在り方の追究

そこで、２年次は、昨年度の課題を踏まえ大きく２つの柱で研究を進めていく。

柱１ 子どもが「学びをつなぐ」ための 環境整備	柱２ 子どもが「学びをつなぐ」ための 学習指導
○　学習プランの実施・評価・改善 （ＰＤＣＡサイクルの形成） ○　カリキュラム研究部会の組織 ⇒　生活科研究班、総合的な学習の時間研究班、特別活動研究班の組織	○　「学びをつなぐ」３つの姿を踏まえた、各教科等での学習指導の在り方の追究

３　研究の仮説

子どもが「学びをつなぐ」ための環境整備を行うとともに、「学びをつなぐ」という３つの姿を基に、各教科等の１単位時間や単元（題材）の授業を計画・実施・評価・改善していくという授業実践のＰＤＣＡサイクルを充実させることで、子どもは８つの資質・能力を身に付け、各教科等の枠を超えて発揮することができるようになるであろう。

４　研究計画

年　次	研　究　内　容
１年次	○　子どもが「学びをつなぐ」カリキュラム・マネジメントの創造
２年次	○　子どもが「学びをつなぐ」カリキュラム・マネジメントの展開 ・　子どもが「学びをつなぐ」ための環境整備 ・　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導
３年次	○　子どもが「学びをつなぐ」カリキュラム・マネジメントの発展

５　研究の実際

⑴　本校が育成をめざす８つの資質・能力の定義付け

１年次に本校が育成をめざす８つの資質・能力について簡潔な言葉で整理を行った。しかし、研究をとおしてこの８つの資質・能力を育んでいくうえで、それぞれが一体どのような力を指すのかということを全職員が明確に共通理解しておく必要があると考えた。そこで、再度改めて８つの資質・能力について本校なりの定義付けを行い、共通理解を図った。

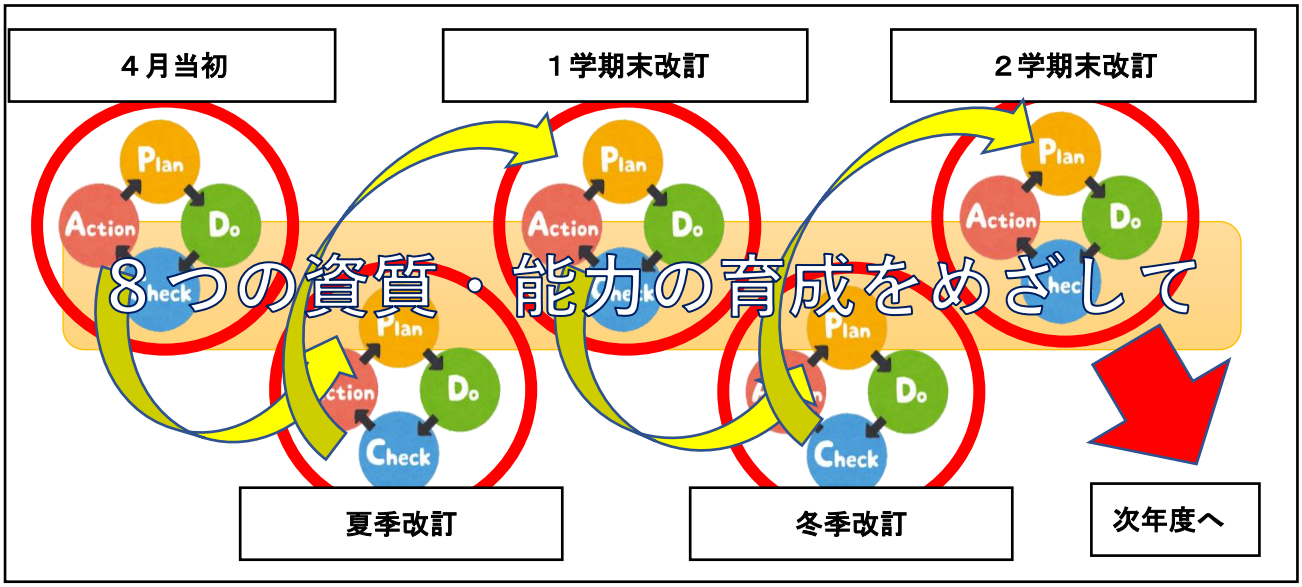
課題発見力	事象に対して、問いをもち、解決への意欲をもつ力 学んだこと、分かったことから新たな問いをもつ力
創造力	自分や社会にとって、よりよいものや考えを生み出す力 ものや考えに新たな価値を見いだす力
論理的思考力	見通しをもち、筋道立てて考える力
探究力	「知りたい」という思いをもち、自分の学びをふりかえりながら、解決方法を工夫して、粘り強く学び続ける力
協働力	目的に向かって、仲間と互いのよさや考えを認め合いながら、課題解決に向かう力
感性	あらゆるもの（美しいもの、素晴らしいもの、驚きのあるもの等）に心が動き、素直に表現しようとする力
言語能力	言葉の働きや役割について理解する力 目的意識や相手意識をもち、言葉や図、絵、身体表現等を通じて思いや考えを分かりやすく表現する力
情報活用能力	多くの情報のなかから、自分に必要なものを見極め、適切に活用できる力 複数の情報を結び付けて、新たな意味を見いだす力

⑵　子どもが学びをつなぐための環境整備

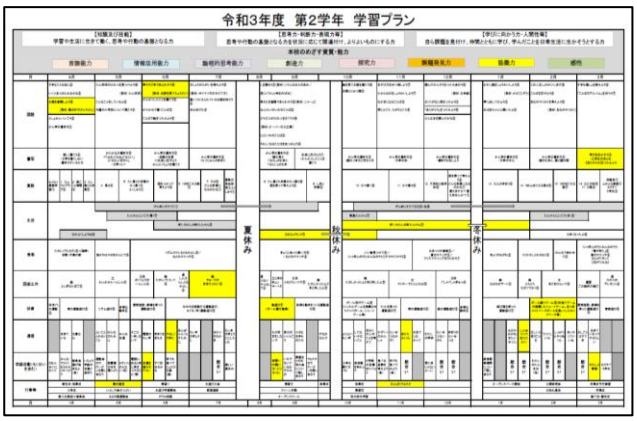
①　学習プランの実施・評価・改善（ＰＤＣＡサイクルの形成）

１年次に学習プランの見直しを行った。しかし、社会の状況、目の前の子どもの実態は日に日に変化していく。現行の学習プランが子どもが学びをつなぐうえで、資質・能力のつながりが十分に検討されたものになっているか、またそのために必要な配列がなされているか等、実施・評価・改善を続けていくことが大切である。このＰＤＣＡサイクルの充実が本校の育成をめざす８つの資質・能力の育成につながっていくはずである。

２年次は夏、１学期終わり、冬、２学期終わりと昨年度よりも短い期間で評価、改善を図ることで、よりよい学習プランへと洗練させていけるようにした。



また、授業を行うにあたっては、学習プランを基に、各単元（題材）が本校が育成をめざす８つの資質・能力のどの力とかかわりがあるのか、その力を育成するために、その単元前後につながりのある単元（題材）や行事等がないかを確認し、教師が育成したい資質・能力や学びのつながりを意識しながら単元（題材）構成や授業を行った。



②　カリキュラム研究部会の組織

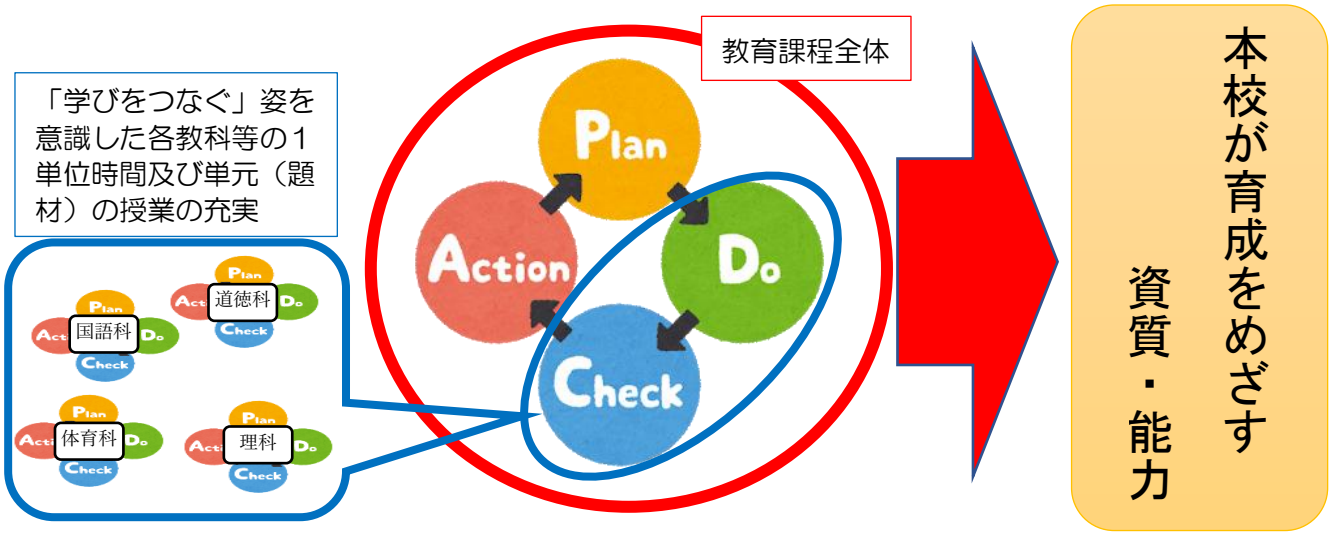
１年次に、カリキュラム・マネジメントの中核に据えた生活科、総合的な学習の時間、特別活動の更なる充実をめざし、「カリキュラム研究部会」を組織し、全職員で生活科、総合的な学習の時間、特別活動の授業づくりや全体計画の整備等を行うこととした。この取組は、カリキュラム・マネジメントのための人的または物的な体制の確保にもつながる。この取組により、学年間の内容や資質・能力のつながり、各学年で身に付けさせたい力等が明確になり、指導に生かすことができた。

⑶　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方（各教科等指導）

①　カリキュラム・マネジメントにおける学習指導の位置付け

１つめの柱として、全体計画の作成や整備を行ってきた。しかし、全体計画の作成や整備だけで留まっていては、本校が育成をめざす８つの資質・能力の育成という目的は実現されない。作成した全体計画を基に、各教科等で１単位時間や、単元（題材）レベルの授業を充実させていくことが何より重要である。

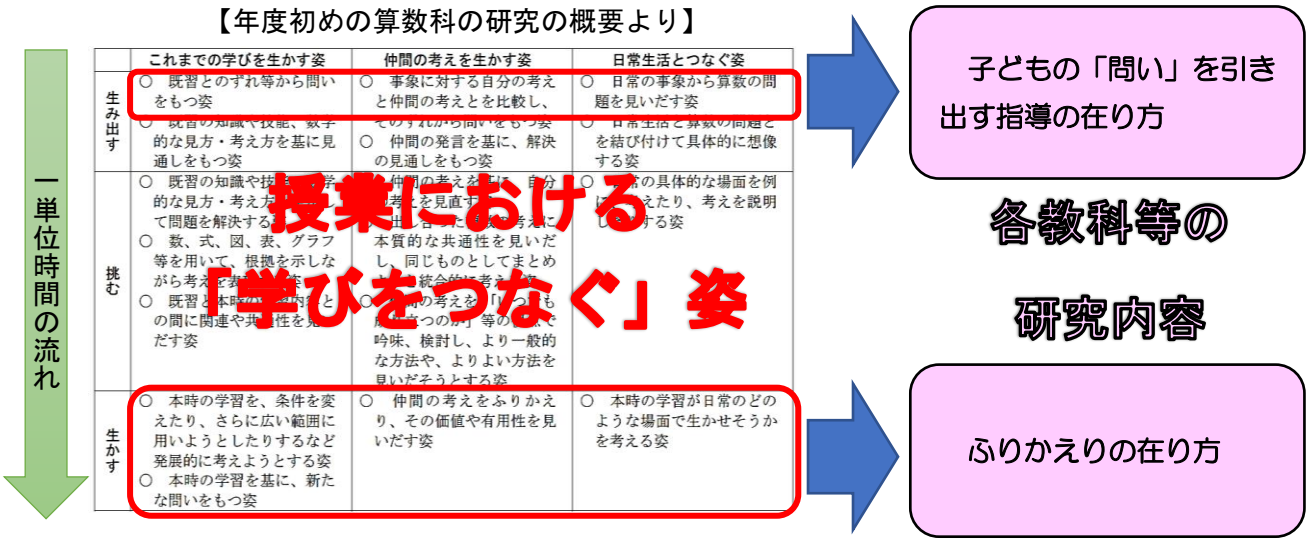
「これまでの学びを生かす」「仲間の考えを生かす」「日常生活とつなぐ」という３つの姿を基に、各教科等の１単位時間や単元（題材）の授業を計画・実践・評価・改善していく。その各教科等の授業におけるＰＤＣＡサイクルの充実が、教育課程全体の大きなＰＤＣＡサイクルの充実、ひいては本校のめざす８つの資質・能力の育成へとつながっていくと考える。



②　各教科等における「学びをつなぐ」姿の明確化⇒各教科等の研究内容の精選へ

１年次の課題として、「学びをつなぐ」３つの姿が、各教科等で現れていたかどうかということが検証されぬままになってしまったということが挙げられていた。そこで、年度初めに再度各教科等で話し合い、３つの視点を基に各教科等でめざす「学びをつなぐ」子どもの姿を明確にすることにした。今年度は、「学びをつなぐ」３つの姿が、１単位時間の流れのなかでどのように現れるのかを下図のように明らかにしていくことで、より具体的に各教科等における「学びをつなぐ」姿をイメージし、研究内容へ生かすことができるように工夫した。

【年度初めの算数科の研究の概要より】



③　学習指導案の改訂

本時の授業の目標やねらいがどのくらい達成されたのか、またそれはなぜかといった視点で授業を的確にＣ（評価）しておかなくては、次のＡ（授業改善）、さらには子どもの資質・能力の向上へはつながらない。そこで、２年次は、従来の指導案形式に改訂を加えた。

単元（題材）の目標の下に評価規準を記載するようにし、目標を基に、学習後の子どもの姿を明確にイメージできるようにした。また、単元（題材）の評価規準が、指導計画のなかのどの部分にかかわるのかを明記することで、１単位時間ごとの到達度のイメージを具体的にもつことができるようにした。四角囲みで、評価の方法についても明記し、子どもの見取りの視点を明確にもち、授業の計画・実践・評価・改善に生かすことができるようにした。

２　単元の目標

D(2)		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
起こり得る場合を順序よく整理するための図や表等の用い方を理解し、落ちや重なりなく調べることができる。	事象の特徴に着目し、順序よく整理する観点を決めて、落ちや重なりなく調べる方法を考察することができる。	起こり得る場合の調べ方について調べる方法や観点をふりかえりながら粘り強く考えたり、生活や学習に活用したりしようとする。

３　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①　表や樹形図等のかき方を理解している。 ②　表や樹形図等を用いて、起こり得る場合を落ちや重なりなく調べることができる。	①　順番に並べて整理したり、あるものを固定して考えたりするなど事象の特徴に応じて、どのような観点で整理すればよいかを判断できている。	①　起こり得る場合について、方法を工夫しながら、粘り強く考えようとしている。 ②　起こり得る場合の調べ方が生活や学習に生かせる場面を見いだし進んで生かそうとしている。

７　単元指導計画（９時間）

段階	主な学習活動及び学習内容	主な教師のかかわり	知・技	思	態
生み出す(2)	1　組合せ方の整理の仕方について考える。（２時間） ○　図や表を用いた整理の仕方(1)	○　表に○を記していく方法や組合せを順に書き出していく方法等、一人一人が思い付く方法で調べさせ、発表させることで、それぞれの方法のよさを共有することができるようにする。	①	①	
	○　選ばないものに着目した整理の仕方(1)	○　選ぶものを記入している表と、選ばないものを記入している表とを比較させることで、かき方が異なるのにせ結果が同じなるのかという「問い」をもつことができるようにする。	②		
挑む(3)	2　並べ方の整理の仕方について考える。（３時間） ○　全体を並べるときの並べ方(1)	○　組合せで考えた場合と樹形図で考えた場合とを比較させることで、組合せの場合と、並べ方の場合とでそれぞれに合った方法があることを理解することができるようにする。	①		
	○　全体から複数を選んで並べるときの並べ方(1)			①	①
本時 3/3	○　並べ方の練習問題(1)	○　１段～４段の結果から、多くの子どもが５通りと予想するはずである。その予想を覆したうえで「じゃあ６は？」と問うことで、「何通りだろう？」という問いをもつことができるようにする。	②		①
生かす(4)	3　起こり得る場合を整理し目的に合った場合を選択する。（２時間） ○　目的に合った乗り物の選択(1) ○　目的に合った道順の選択(1)	○　所要時間や料金、距離等、様々な条件を提示することで、その都度「どの場合が適切だろう？」という「問い」をもつことができるようにする。	②		②
	4　集合の考えを用いた問題の解決の仕方を考える。（１時間）	○　テープ図や線分図、ベン図等、これまでに学習した[illegible]を用いて解決しようとする姿を価値付けることで、既[illegible]を生かし解決することのよさを実感できるようにする。	①		
	5　本単元の学習をふりかえる。（１時間） ○　練習問題				

【学習指導案（算数科）の例】

さらに、「４　単元（題材）について」の部分には、研究テーマに沿った単元（題材）ならではの育てたい資質・能力に加え、本校が育成をめざす８つの資質・能力との関連についても明記し、身に付けさせたい資質・能力を意識しながら授業づくりを行っていくようにした。

４　単元について

本単元は、1964 年の東京五輪・パラ五輪開催という事象を基に、戦後日本が国際社会で果たしてきた役割について理解し、我が国の将来を担う国民としての自覚を養うことをねらいとしている。

戦後日本は、GHQ 主導で日本国憲法を制定し、民主的で世界平和を希求する国家をめざしていく。その後開催された東京五輪・パラ五輪は、日本が戦後復興を果たし、国際社会の一員として認められる契機となった。戦後約 20 年間は、国民総出で一大事業に取り組み、世界にも稀な高度経済成長につながり、現代日本の礎が築かれた時代である。しかし、公害等の社会問題が起きるのも、この頃である。

このような内容を学習することは、主権者として日本の在るべき姿を問い、考え続けていく子どもを育み、本校のめざす社会にとってよりよいものや考えを生み出す創造力の育成にもつながり意義深い。

【社会科の例】

４　題材について

本題材は、様々な音楽を形づくっている要素を変化させる変奏曲を聴いたり、即興的に変奏させて遊んだりすることをとおして、変奏曲のおもしろさへの興味・関心を高めることをねらいとしている。

変奏曲は、「主題」となる旋律と、主題の音色やリズムや強弱等を変えて演奏していく「変奏」で構成された音楽である。教材曲「ピアノ五重奏曲『ます』第４楽章」は、変奏ごとに主役となる楽器が変化するため、主に音色の変化を捉えやすい曲である。また、音色の変化とともに、リズムや強弱、速度等も変わるため、変奏によって変化していく情景を想像しやすい。

本題材を学習することは、音色やリズム、強弱等の音楽を形づくっている要素が変化する変奏曲のおもしろさを仲間と味わうことができ、本校で育成をめざす協働力や感性を育むうえで意義深い。

【音楽科の例】